

論文

アルゲマイネ紙（在独ユダヤ人一般週刊新聞）と ホロコースト後の在独ユダヤ人

田 村 円

はじめに

戦後ドイツにユダヤ人が存在することは、ホロコースト後の世界において何を意味したのだろうか¹。現在のドイツの公的認識では、ドイツに暮らすユダヤ人とは、ドイツ民主主義の不可欠な構成要素であると見なされている一方、過去の両者の関係についても、ホロコーストだけでなく、ナチ時代以前から長らく両者が共存していた歴史も重要な側面であると指摘されている。ユダヤ側も現在、こうした基本路線を共有していると言えるだろう²。しかし、こうした現在のドイツ＝ユダヤ関係³への認識は、ナチ体制が崩壊した直後において決して自明のものではなかった。ユダヤ人世界において「殺人者の国」となったドイツは、もはやユダヤ人が暮らすべき土地ではなかった。また多くのドイツ住民の間でもユダヤ人生存者の運命への関心は薄く、反ユダヤ主義も残存していた。他方、イスラエル建国の翌月に世界ユダヤ人会議が出した「モントルー決議」は、「殺人者の国」であるドイツに留まり、あるいは亡命先から帰国するユダヤ人に対するユダヤ世界からの破門状を意味した。しかし現実には「ユダヤ人不在の土地」とはならなかったドイツで、1950年に各地のユダヤ人共同体（ゲマインデ）を束ねる頂上組織として「在独ユダヤ人中央評議会（以下、中央評議会）」（Zentralrat der Juden in Deutschland）が設立された。

「在独ユダヤ人」（Juden in Deutschland）とは、1945年以後のドイツに在住するユダヤ人を指す呼称である。在独ユダヤ人には、ナチ時代以前からドイツに暮らしていた「ドイツ・ユダヤ人」（deutsche Juden⁴）の生き残りだけでなく、終戦前後にドイツにやってきた東欧出身のユダヤ人グループ「ユダヤ人DP」（jüdische DP⁵）が多数含まれており、ナチ体制以前のドイツにおけるユダヤ人とは異なる構成をもつマイノリティ集団となった。

戦後ドイツにおけるユダヤ人の歴史に関する研究は長い間、ユダヤ側とドイツ側のそれぞれによって取り組まれて

きたと言える。はじめにこれに着手したのは、ゲマインデの再建に関与した当事者であるドイツ・ユダヤ人であり、なかでも各地のゲマインデ代表者、その後は戦後生まれの第二世代がユダヤ人共同体の再建史や戦後の反ユダヤ主義研究の担い手となってきた⁶。他方、ドイツ側では1990年代前後から各地の大学や機関で、歴史学者・社会学者・政治学者らが反ユダヤ主義研究とユダヤ人DP研究、補償研究、在独ユダヤ人の機関史研究を中心に取り組み始め⁷、その後2000年代頃からは国際的に研究対象となった。近年になって統合の兆しが見え始め、戦後にドイツで生まれた第二世代のユダヤ人歴史家ミヒャエル・ブレナーを中心に、各分野で研究成果をあげてきたドイツ側とユダヤ側双方の研究者が編纂した著作『在独ユダヤ人の歴史——1945年から現在まで⁸』は、現時点における戦後ドイツのユダヤ人史の総合的叙述として位置づけられる。本稿もまたこうした研究成果を摂取した上で展開するものである。

だがこうした研究において、ドイツ＝ユダヤ関係については、反ユダヤ主義研究におけるドイツ住民とユダヤ人生存者の関係や⁹、日本も含めて国際的な研究関心を集めている「現実政治（リアルポリティクス）」から見たドイツ＝イスラエル関係がドイツ＝ユダヤ関係として論じられることはあっても¹⁰、在独ユダヤ人自身が関係をどのように考えていたのか、という問いに焦点が当てられることはほとんどなかった。ドイツ・ユダヤ人とユダヤ人DPの関係についても、異なる宗教的・社会的・文化的背景をもつ両者が互いに向ける偏見や差別意識、地域の共同体における対立関係が専ら語られてきた。

これに対して本稿は、ホロコースト直後のドイツで、在独ユダヤ人という新たなアイデンティティの形成が同時代人によっていかに試みられたのか、そして過去と現在のドイツ＝ユダヤ関係はどのように考えられたのかという視点から、『在独ユダヤ人一般週刊新聞（以下、アルゲマイネ紙）』（„Allgemeine Wochenzeitung der Juden in Deutschland“）に着目する。1946年4月にローカルなユダヤ人ゲマ

インデ新聞の一つとして出発したアルゲマイネ紙は、連邦共和国の建国期にはユダヤ側とドイツ側の双方に読者を持つ、唯一のユダヤ全国紙に発展している。アルゲマイネ紙に着目する理由として、「在独ユダヤ人」が新聞名に冠されていることだけでなく、こうした同紙の背景から在独ユダヤ人全体の関心事を把握するために適切な媒体であることが挙げられる。

アルゲマイネ紙については、従来のドイツ現代史研究やユダヤ史研究において記事の引用元として言及されることはあっても、長らく研究対象となることはなかった。その中で唯一、中央評議会に並ぶ在独ユダヤ人の利益代弁の役割を持った機関としてアルゲマイネ紙を位置づけた、ドイツの歴史家アンドレア・ジンの研究がある¹¹。だが、代表争いや汚職スキャンダル、ユダヤ人DPの移住・統合問題など共同体内部のものといえる問題、また外部に対する要求——連邦共和国に対しては補償問題、ユダヤ人世界に対しては在独ユダヤ人の地位向上など——に関連する考察に限定されており、在独ユダヤ人の統合についても、実利的に共同体を守るための戦略という観点でしか論じられていない。またドイツ＝ユダヤ関係に関する言論についても、ナチ時代以前の典型的な同化ユダヤ人と見なされることの多かった同紙発行人カール・マルクス（1897-1966）の単なる個人的な関心事とされている。

こうした従来の見方に対して本稿は、アルゲマイネ紙は、「在独ユダヤ人」としての連帯をどのように促そうとしたのかについて、在独ユダヤ人社会の再建の文脈とホロコースト後の複雑なユダヤ人アイデンティティの観点から明らかにすることを目的とする。その際、これまでは断片的に言及されるだけであった、同紙の多様な協力者の全体像を明らかにすることで、アルゲマイネ紙の国内外の人的なネットワークを描出する。時期としては、在独ユダヤ人社会が定着へと方向づけられていく、1945年春に始まる占領期から49年に始まる連邦共和国の建国期にかけての戦後初期に着目し¹²、史料としては、この時期にアルゲマイネ紙に掲載された記事と同紙の中心的協力者たちの回想・証言を使用する¹³。

本稿ではまず、戦後の在独ユダヤ人を構成した集団をドイツ・ユダヤ人とユダヤ人DPの二つに区分した上で、それぞれを取り巻いた状況を概観する。次に、アルゲマイネ紙の誕生と発展について、ユダヤ人生存者と新聞の関係、地方紙としての出発から全国紙に至るまでの拡大、読者の広がり、担い手たちの全体像を考察する。最後に、アルゲマイネ紙がいかなる理念と目的をもって発行されたのかについて、発行人マルクスと協力者たちの言説から考察する。

1 解放後のユダヤ人生存者の状況

(1) ドイツ・ユダヤ人

かつて大半のドイツ・ユダヤ人は自己を「ユダヤ教信仰をもつドイツ人」(Deutscher jüdisches Glaubens)と理解していた¹⁴。その多くが伝統的なユダヤ人としての生活様式を守り集団で暮らす東欧のユダヤ人と比べると、ドイツ・ユダヤ人は多数派社会に溶け込んでおり、ユダヤ教徒であることを除けば、周りのキリスト教徒のドイツ人とさほど変わらない存在であると自己をみなす傾向が強かった。そのため、ドイツ・ユダヤ人はしばしば「同化ユダヤ人」の典型と目されていた。ユダヤ人として自己を余り強く意識していなかった彼らにとって、ナチ体制下の迫害とホロコーストの経験は皮肉にも、ユダヤ教に目覚める決定的な契機となった。

1945年5月8日にナチ体制が崩壊したとき、ドイツ・ユダヤ人の生き残りはどのような状況にあったのだろうか。ヒトラーが政権を掌握した33年初頭、ドイツ・ユダヤ人はドイツ全人口の0.7%にあたる約50万3000人を数え、その約半分の27万人が、41年10月にユダヤ人の国外移住が禁止されるまでの時期に国外へ亡命ないし移住している¹⁵。ドイツに留まったユダヤ人は、やがてその大半が東方の絶滅収容所へ送られ、そこで殺害された。ドイツ領内で解放を迎えたドイツ・ユダヤ人は約1万から2万を数えたに過ぎない¹⁶。彼らは、ナチ時代をどのように生き延びたかによって、次の4つの集団に区分できる。

第一に、ホロコーストを生き延びたドイツ・ユダヤ人の最多集団を形成したのが、いわゆる「アーリア人」すなわちキリスト教徒のドイツ人配偶者をもった「混合婚」のユダヤ人である。他のユダヤ人に比べ優遇され、絶滅収容所への移送対象から外されることが多かった彼らは、戦後に地域のユダヤ人ゲマインデの再建に最初に着手した。

第二に、「合法的」に国内に留まることができた「混合婚」のユダヤ人に対し、ドイツ国内で置かれながら、地下で「非合法」な存在として生き延びた者たちが挙げられる。初期のアルゲマイネ紙の編集部員として活躍したラルフ・ジョルダーノも地下で生き延びたユダヤ人の一人であった。

第三の集団は、東欧出身のユダヤ人生存者と同様、強制収容所の生存者である。アウシュヴィッツを、身をもって体験した後、ユダヤ人共同体の再建に尽力し、中央評議会が設立された際は、それぞれアメリカ地区、イギリス地区、ベルリン地区の代表者として幹部会メンバーとなったフィリップ・アウアーバッハ、ノルベルト・ヴォルハイム、ハインツ・ガリンスキーは、この集団に属する。彼らもまた創刊時からのアルゲマイネ紙の協力者であった。

第四に、ナチ時代に国外・海外に逃亡・移住し、そこで

終戦を迎え、戦後になって再びドイツへ帰還した「再移住者」である。著名な再移住者は一般に、破壊されたユダヤ人社会の再建には余り関心を示さなかったと言われており、むしろ無名の再移住者たちがこの仕事に身を捧げた。アルゲマイネ紙の発行人マルクスと中央評議会の初代事務局長ヘントリーク・ゲオルゲ・ファン・ダムは、亡命先のイギリスから占領下のドイツに戻った再移住者であった。

(2) ユダヤ人DP

ナチ時代を様々な生き延びたドイツ・ユダヤ人に対して、戦後ドイツのユダヤ人の中でまったく新しい集団を形成したのがユダヤ人DPである。彼らは、ナチ占領下の東欧の故郷から、アウシュヴィッツなどポーランドの絶滅収容所に移送された後、戦争末期のドイツ国内の収容所への強制連行を生き延び、そこで解放を迎えた。解放時の境遇は、強制収容所を生き延びたドイツ・ユダヤ人に近いが、出身国に戻ることなくDPとなってドイツに滞在する選択をした彼らは、ユダヤ人DPと呼ばれた。彼らの大半は、ユダヤ人を優遇したアメリカ占領地区を中心に設置された「DP キャンプ」に入ることになる。

連合軍は当初、すべてのDPが可及的速やかに故国へ帰還するよう要請した¹⁷。非ユダヤ人DPの大部分が帰国を果たしたのに対し、ユダヤ人DPの中には帰国を拒む者が多かった。その大きな理由として、第二次世界大戦後の東欧に広く流布した反ユダヤ的な風潮を指摘しなければならない。たしかに東欧のユダヤ人の共同体は、ナチ・ドイツの力で破壊されたが、これに非ユダヤ人の現地住民が関与していたことは明らかであった。多くの東欧ユダヤ人が、故郷で再生した反ユダヤ主義から逃れるため、DP キャンプに庇護を求めて流れ込んだ。戦後、故郷に戻ったユダヤ人は、仕返しを怖れる現地住民の反発から集団的暴力の標的となった¹⁸。

また、ホロコーストを体験したユダヤ人DPの間でシオニズムの影響力が強まり、以前に増してユダヤ人の自意識が高まっていたことも帰国を拒むもう一つの理由となった。熱心なシオニストとなった多くのユダヤ人DPは、パレスチナへの移住を望み、ドイツでその機会を待った¹⁹。彼らの多くにとって、ドイツのDP キャンプは目的地に向かう「通過地点」あるいは「出発までの待合室」となったが、一部はドイツに留まった。イスラエル建国後にピークを迎えた国外移住の波が収まり、1950年にかけて各地のDP キャンプが閉鎖されると、ドイツに留まるユダヤ人DPの数は3万人を切り²⁰、やがてドイツ・ユダヤ人とユダヤ人DPの人口はほぼ均衡するに至った。

(3) ユダヤ人生存者と新聞

ホロコーストを生き延びたユダヤ人は、ドイツ・ユダヤ

人であれ、ユダヤ人DPであれ、まるで孤児のような存在となった。家族・親戚・友人のほとんどが殺害されたなかで、一族で唯一の生き残りとなった者も少なくなかった。家族と別れて亡命した者、地下に潜伏して生き延びた者も同じ境遇であった。こうしたなかで新聞は、絆を失ったユダヤ人の新たなアイデンティティと連帯意識を育む道具としての機能をもった²¹。

アルゲマイネ紙の論説寄稿者でもあったファン・ダムの回想によると、解放後のユダヤ人生存者は、自分の意見を自由に述べ、世界の出来事を自分たちの観点で議論し、一般新聞では顧みられない自分たちのことを報じたいという欲求を強く持っていた²²。抑圧と迫害の時代を生き延びた彼らは、気持ちのはけ口を必要としていたため、その声を掬う新聞には大きな需要があった。小さな共同体において新聞はますますこうした役割を負う傾向にあったが、とりわけユダヤ人新聞には、同じ運命を共に負った共同体としての意識に由来する、読者と編集部との距離の近さという特徴も見られた²³。アルゲマイネ紙創刊20周年に際して編集部は、解放直後のユダヤ人新聞を発行した者たちにとって「戦後の全般的混沌のなか、強制収容所の生存者や故郷に帰ってきたユダヤ人は、指針を示しながら有用な役割を果たしてくれる情報紙を必要としている」という考えが新聞発行の起点となっていたと振り返っている²⁴。そのため、占領下のドイツ各地で数多く発行されたユダヤ人新聞はたいいてい、生存者の相互扶助に必要な情報を載せていた。主にドイツ・ユダヤ人読者が対象となったゲマインデ紙はドイツ語版が中心であったが、東欧出身のユダヤ人生存者が滞在したユダヤ人DPのキャンプでは、彼らの母語であるイディッシュ語やヘブライ語の新聞も数多く刊行された。

2 アルゲマイネ紙の誕生と発展

(1) 地域紙から全国紙へ

アルゲマイネ紙もまた、占領下のドイツで数多く発行されたユダヤ人新聞の一つとして出発した。占領下のドイツで新聞を発行するには連合軍の認可が必要であったが、アルゲマイネ紙の原点となる新聞『ノルトライン・プロヴィンツとヴェストファーレンのユダヤ人ゲマインデ紙』も1946年4月、イギリス占領軍の認可を得たイギリス地区の一地域紙として創刊されている。新聞の名称が示すように、北西ドイツの一地域に属するユダヤ人ゲマインデのためのコミュニティ紙であった。

占領期に刊行されたユダヤ人新聞はどれも寿命が短く、数年で廃刊となる場合が大半であったが、アルゲマイネ紙は拡大の一途をたどった。まず量的な拡大を見てみると、隔週新聞として創刊された同紙は、48年9月より週刊新聞

となった²⁵。これに先駆けて、新聞紙面のサイズは47年4月より連合軍による許可を受けて²⁶、A4だった紙面の大きさから、一ページに複数の記事が掲載できるサイズに拡張されている。さらに4頁だった創刊号から徐々に増えていった頁数は、アルゲマイネ紙に改称された49年4月以降に16頁構成となっている。新たな名称と共に、発行地域・発行頻度・紙幅の観点においても安定が見られたことから、連邦共和国が発足する49年は、同紙の発展においても転機となったことがわかる。

占領期に発行されたユダヤ人新聞は、各地のユダヤ人生存者のための情報誌的な特徴を帯びていたが、同紙も他のゲマインデ紙と同様、コミュニティ紙としての役割を自覚していた。全国紙となった後も、地域のゲマインデ情報を載せるために一定の紙幅が確保されている²⁷。情報が掲載されるゲマインデの数は徐々に増加していき、新聞の発行地域に留まらない地名が見られるようになった²⁸。このように、発行地域を越えた地域のゲマインデ情報を掲載することで、同紙は地域を越えた在独ユダヤ人同士の情報交換の場を提供した。創刊号の「創刊の辞」では、この新聞が各地の「ゲマインデの構成員の間で、またゲマインデ同士をつなぐ結び目となること」が願われたが²⁹、各地のユダヤ人のコミュニケーションを仲介する機能は、全国紙『在独ユダヤ人一般週刊新聞』へと拡大した後も引き継がれていった。

(2) 読者の広がり

新聞発行の地域的広がりに応じて、発行部数も増加の一途をたどった。創刊時に1500部であったのが、1946年に2500部、47年に7000部、48年に1万5000部へと上昇し、49年には2万2000部に達した³⁰。当時のドイツのユダヤ人口はユダヤ人DPを含めて約3万であったこと、さらにドイツ語新聞ゆえにドイツ・ユダヤ人が購読者の中心であったと考ええると、かなりの数である。この発行部数の多さは、同紙の読者がドイツに在住するユダヤ人に限られなかったことも示している。実際、国外に暮らすドイツ出身のユダヤ人購読者、ドイツ人購読者が存在したことを数々の証言が裏付けている。例えば、在外ドイツ・ユダヤ人協力者でロンドンのヴィーナー・ライブラリー館長アルフレート・ヴィーナーは、ドイツ人にとっても同紙が重要な存在であったと、次のように回想している。

何年も前、私はボンに当時の連邦内相グスタフ・ハイネマン博士を訪ねた。彼の仕事机の上には『在独ユダヤ人一般週刊新聞』が乗っていた。私はその山のようなユダヤ系ではない広告の掲載数に驚いた [...] 数多くのユダヤ人ではない人々が同紙を購読しており、またユダヤ系ではない諸官庁や諸組織でも同紙は購読さ

れている³¹。

この証言からは、ドイツの連邦大臣、諸官庁、諸組織が同紙を購読していたことが分かる。実際、紙面でも様々な機会に政治的指導者をはじめとするドイツ人から寄せられた寄稿が大きく掲載されており、ユダヤ系ではない企業の広告も創刊年以降、常に多数掲載されている。

他方、ヴィーナーは「ドイツの国境の外側にいる多くのユダヤ人」読者もまた、「古き故郷」ドイツ、そして「ユダヤ人の新しき故郷」の状況について知るために同紙を購読していると証言している³²。創刊号では、発行目的の一つとして「外国に暮らすユダヤ人」に「在独ユダヤ人の状況を伝える像を提供すること」が表明されたが、編集部による読者への報告からは、創刊から1年も経たないうちに同紙は国外への新聞発送の許可を得て、海外での販売経路の拡大と読者獲得に成功していたことが分かる³³。さらに48年5月には国外の読者向けの定期購読の制度が確立された³⁴。同紙が国内外に読者を持つ新聞となった背景には、編集部のこうした努力が指摘できる。

(3) 担い手

① 発行人カール・マルクス (1897-1966)

のちにドイツだけでなく国際的にも著名な新聞となっていったアルゲマイネ紙は、新聞紙面の質も評価され、信頼できる情報源として、世界各国の新聞に引用される媒体となった³⁵。こうした過程において、同紙の発行人兼編集長であるカール・マルクスは、アルゲマイネ紙と切っても切り離せない存在として認知されていった。

マルクスがアルゲマイネ紙で発揮したイニシアティヴの背景には、いかなる経験があったのだろうか。1897年5月9日、600年以上続くドイツ・ユダヤ人の家系に生まれたカール・マルクスは、裕福な市民層のユダヤ人家庭で幼少期と青年期を過ごした³⁶。一家は地域のユダヤ人ゲマインデに属していたが、当時の多くのドイツ少年と同じようにドイツ・ナショナリズムの中で成長したマルクスは、17歳の時に第一次世界大戦が勃発すると、すぐに緊急卒業資格臨時試験(Notabitur)を受けて自発的に出征している³⁷。

苛酷な前線経験から、平和主義者となって復員したマルクスは、ジャーナリストとしての職業活動と並行して、政治的な活動に打ち込んだ。なかでもヴァイマル共和国初期にマルクスが積極的に参加したドイツの青年民主運動は、デュッセルドルフ市長カール・アーノルトや連邦大臣エルンスト・レンマーをはじめとする後の連邦共和国の指導的政治家と出会う契機をつくり、彼らが民主主義者・平和主義者としてのマルクスに理解と信頼を寄せる重要な根拠となった³⁸。さらにドイツ民主青年団のバーデン州第二議長と同団本部の幹部職を務めた後、ドイツ民主党の党員と

なったマルクスは³⁹、連邦共和国の初代大統領となった同党の政治家テオドーア・ホイストともドイツ民主青年団の集会で知己を得ており、これを契機に戦後に交流を深めた⁴⁰。

ナチ党が政権を取った後、マルクスは自らのユダヤ人としての人種的立場、民主主義者としての政治的立場により、亡命を強いられた。1933年3月、議事堂炎上事件の直後に単身ザール地方に向かったマルクスは、その後フランス、イタリア、モロッコのタンジールを経てロンドンで終戦を迎えた。12年に及んだ亡命生活はマルクスに大きな身体的ダメージを与え、ドイツに残った両親と兄は殺害された⁴¹。その一方、とくにロンドンで出会ったドイツ出身のユダヤ人亡命者仲間は、マルクスが帰還後に創刊したアルゲマイネ紙を支える協力者となった。

46年5月、マルクスは「ユダヤ人生存者を助けること」を目的として、イギリス当局にドイツへの帰国を申請し、同当局から最初に帰還許可を得た民間人となった。新聞の発行を通じてユダヤ人生存者の支援に貢献することを決意したマルクスは、亡命地ロンドンで知り合い、帰還後に夫婦となるドイツ・ユダヤ人亡命者リリー・ペーレントと共にイギリス地区のデュッセルドルフに新聞社を設立した⁴²。

②協力者

ローカルなユダヤ人ゲマインデ紙として出発した同紙は、国内外の多様な協力者に支えられた。物資だけでなく情報収集網も不足していた創刊当時、発行人の人的組織力や人脈は重要であったが、こうした困難な時代において、ユダヤ人とドイツ人とのコンタクトを重ねた発行人・編集長マルクスの仲介力は同紙の発展に大きな影響を与えた。

アルゲマイネ紙には、マルクスの同志ともいえる中心的な編集部員に加え、翻訳者・通訳者、国内外の各地に在住する通信員、寄稿者、重要な出来事に際して現地に派遣された特派員、欄やコーナーの担当者、インタビューなど、様々な協力者が存在した。それぞれの役割で同紙に臨機応変に協力した人々のことを、マルクスたちはアルゲマイネ紙を共に形づくっていく同僚という意味で協力者（Mitarbeiter）と呼んだ。そのため、取材やインタビューに応じたユダヤ人・ドイツ人双方の公的人物もまた協力者と位置づけられている。

在独ユダヤ人だけでなく、ドイツ人、在外ドイツ・ユダヤ人も数多く含まれ、同紙の発展において欠かすことのできない存在となった協力者には、どのような人々がいたのだろうか。

(a) 編集部とドイツ各地からの協力者

リリー・マルクスは後に、発行人を引き受けた新聞の編集と発行の仕事は当初、まさに「典型的な家族経営」であったと回想している⁴³。最初の編集部では、本組みを始

め、あらゆる仕事を担当したマルクス、彼にとって「最初と同僚」であり販売を担当したリリー、さらに編集部員と秘書が一人ずつ加わった計4人で仕事が始められた。

発行人兼編集長となったマルクスは、ドイツで活躍する若手ジャーナリストの育成者としての顔も持った。マルクスのもとで職業経験を積み、アルゲマイネ紙の主戦力となったジョルダノに並び、連邦共和国のメディア界で長きにわたり活躍するマルセル・ゲルトナーもアルゲマイネ紙でジャーナリストとしての修業を積んだ。若手を導きながらも、自らも若者のような情熱で一緒に仕事をしたというマルクスの一面について証言したゲルトナーは、とくにマルクスが率いた編集部の自由闊達な様子や、年長者だからといって指図をせず、自分の力、イニシアティブで挑戦させることを重視したマルクスの育成者としての才能を指摘している⁴⁴。

ドイツ各地のユダヤ人共同体の代表者も、アルゲマイネ紙の主要寄稿者であった。とくに、中央評議会の幹部会メンバーは多くの記事を寄稿している。イギリス地区のユダヤ人ゲマインデ紙だった創刊年から1950年代初頭にかけて多くの記事を寄稿したのは、ヴォルハイムとアウアーバッハである。二人は、主にユダヤ人生存者の支援、共同体の再建、補償の要請に関連する記事を書いた。他方、長年ベルリンのユダヤ人ゲマインデ議長を務め、後に中央評議会議長に就任するガリンスキーは、ヴォルハイムが51年に合衆国に移住し、アウアーバッハが52年に獄中自殺を遂げた後も、在独ユダヤ人社会を代表して寄稿を続けた。法律家でもあるファン・ダムは、補償問題が重要な課題であった戦後初期において、専門的な見地から補償問題について多くの記事を執筆し、連邦補充法が成立した後は読者のためにアルゲマイネ紙から刊行された同法の注釈や申請案内の編纂も担当した。

協力者は中央評議会の代表者だけではない。ゲマインデの活動に関連する記事を寄稿した各地のユダヤ人共同体の代表者も重要な寄稿者であった。彼らの寄稿には、ドイツ側との積極的な協働の報告が数多く見られた。例えばベルリンでは、ガリンスキー、社会民主党の連邦議会議員ジャンネッテ・ヴォルフ、ユダヤ人ゲマインデ専属ラビのナータン・P・レヴィンソンらが、市政府や協力協会、公共ラジオ放送局などとの協働、現地のドイツ人学生や住民による反ユダヤ主義的現象や旧ナチの再台頭に対抗する抗議について寄稿した。文化界からの協力者——例えば、ドイツの劇場で再び俳優として活躍したフリッツ・コルトナーやエルンスト・ドイチュ——も少なくなかった。加えて、ドイツ・ユダヤ人だけではなく、少数ではあるがユダヤ人DP側にも協力者が存在した。

(b) 国外からの定期寄稿者

アルゲマイネ紙には、ドイツ国外に暮らすユダヤ人協力者も数多く存在した。前述の通り、同紙は創刊年から世界各国に読者を獲得していたが、その中心はドイツ出身のユダヤ人であった。彼らの中には読者であるだけでなく、在住する国のユダヤ人の状況や歴史・社会・文化についてのコーナーを担当する者、現地で起きている重要な出来事取材する特派員を務めた者も多くいた。在独ユダヤ人と国外のユダヤ人世界を繋いだ彼らは、同紙にとって欠かすことのできない存在であった。

筆頭に挙げられるのは、ロンドンに在住するドイツ出身のユダヤ人協力者である。なかでも、エルンスト・ゴットフリート・ローヴェンタール、ヴェルナー・ローゼンストックとエファ・ライヒマンは主要な論客でもあった。彼らの共通点は、マルクスと同様、ナチ時代にロンドンに亡命し、戦後も同地に暮らした常連寄稿者であったことだけではない。亡命前のドイツでも「ユダヤ教徒ドイツ国民中央協会（以下、中央協会⁴⁵）」や難民組織でユダヤ人の福祉とジャーナリズムに携わっていたこと、博士号を取得した知識人であったこと、ドイツ・ユダヤ人の文化的遺産の研究・保存を目的として発足した「レオ・ベック研究所」の共同創設者であったことという共通項も指摘できる。

在外ドイツ・ユダヤ人の寄稿者には、イスラエルに移住した協力者のほか、アメリカ大陸にもディアスポラ諸国としてはイギリスに次いで多くの協力者が存在した。とくに合衆国では、アウフバウ紙の発行人マンフレッド・ジョージがアルゲマイネ紙の重要な協力者であった。アメリカ占領軍に従軍する形で占領下のドイツでも活動した『新しい新聞』発行人ハンス・ハーベの名も挙げられる。ドイツ・ユダヤ人共同体が多数存在する南米大陸では、イディッシュ語話者のモルデハイ・ベルンシュタインが主要な協力者であった。中心的な担い手の多数派を占めるドイツ出身のユダヤ人のなかであって、異色の経歴を持つ西ベラルーシ出身のベルンシュタインは、移住したアルゼンチンを中心に、南米でジャーナリストとして活躍する傍ら、古巣のアルゲマイネ紙に寄稿を続けた。イスラエルで官僚として活躍した後にウルグアイでイスラエル領事となったウリ・ナオールも協力者に数えられている。大陸ヨーロッパでも、フランス、スウェーデン、デンマークを中心に、現地在住の定期寄稿者が存在したが、彼らは居住国におけるユダヤ人の歴史文化と現在について定期的に寄稿した⁴⁶。

(c) ドイツ側

紙面からはドイツ人協力者の存在も見えてくる。記念刊行物に掲載された「最も古くからの協力者名簿」には、少なくないドイツ人の名が連ねられている⁴⁷。彼らは、政党や宗派に関係なく、個々にドイツ＝ユダヤ関係の改善に

関心をもつドイツ人であった。州首相カール・アーノルトをはじめとするノルトライン・ヴェストファーレン州政府の関係者、デュッセルドルフ市の自治体関係者、また社会民主党党首クルト・シューマッハーは、占領期から、寄稿やマルクスのインタビューを通じて、在独ユダヤ人に積極的にメッセージを送った。連邦共和国発足直後の1949年9月、初代首相コンラート・アデナウアーと初代大統領ホイスは、アルゲマイネ紙を通じてユダヤ人にユダヤ暦新年に際する祝辞を送り、その後もインタビューや演説を通じてメッセージを寄せ続けた。彼らの言説の中には、在独ユダヤ人共同体の存在が「ドイツの民主主義にとって必要不可欠である」という共通認識が見られた。

また、各地の協力協会で中心的に活動したドイツ人の多く——例えば、ベルリン協会のハインリヒ・グリューバー牧師やハイデルベルク協会のヘルマン・マース司教——がアルゲマイネ紙の協力者リストに名を連ねている。彼らの多くは、ナチ時代にユダヤ人救済活動に従事していたり、ナチに政治的な抵抗を行ったために職を解かれるなどの憂き目に少なからず遭っており、ナチに対する態度に共通する点があった。彼らに対するユダヤ側の評価を見ると、彼らのこうした経歴は、ユダヤ人にとって信頼を寄せるに十分な根拠となっていたことが看取される。

3 アルゲマイネ紙の役割と自己理解

(1) 再建の証人

① 歴史記録としてのアルゲマイネ紙

マルクスと編集部をはじめとする中心的な担い手たちには、アルゲマイネ紙は始まったばかりである戦後ドイツのユダヤ人が歩む歴史の証人になるだろうという自負があった。創刊から15年を経た1961年、同紙の歩みを記録した『傷、轍、証人——在独ユダヤ人一般週刊新聞の15年間』の編纂を任されたジョルダーノは、アルゲマイネ紙が果たしてきた役割について次のように述べている。

アルゲマイネ紙は、それ自体がユダヤ人の運命を構成する一要素となった。アルゲマイネ紙は、ユダヤ人の運命を反映し、それを共に具現化してきた。この時期に連邦共和国内外で起きたユダヤ人に関わる出来事は、常にアルゲマイネ紙に掲載されてきたのである。[...] 同書は同時代人たちそして未来の世代たちにとって、われわれの現在を残すドキュメントとなるだろう⁴⁸。

このように、解放直後からのユダヤ人の状況を常に反映してきたという同紙が、いわば歴史記録としての役割を果たしてきたことがはじめに言明されている。ジョルダーノは

さらに、「われわれの現在を残すドキュメント」と述べ、同紙は「映し鏡」のように、ホロコースト後のドイツのユダヤ人の状況を反映してきたと自己評価を行った。こうしたアルゲマイネ紙の評価は、新聞に携わった者だけではなく、ドイツ人、在独ユダヤ人、国外のユダヤ人を問わず、同時代を生きた人々の言説に共通する認識となっていた⁴⁹。

また、同紙を史料として保存していくための実践的な取り組みも初年次から行われている。初年次が終わりに近づく1947年3月5日号では、同紙をアーカイブ化する必要性が読者に向けて訴えられた⁵⁰。また、創刊号から19号までの現物が手元にある読者に新聞社への寄付が依頼された。同年4月30日号でも、再び出版社から読者に向けて協力要請が行われ、創刊以来の号で新聞社の元になく欠号を持っている読者に寄付が募られた⁵¹。こうした呼びかけには、この時期からすでに、アルゲマイネ紙が単なる情報誌ではなく、後世に残すべき重要な歴史的史料であるという自覚が持たれていたことが反映されている。

②読者の声

在独ユダヤ人の読者はまさに、この戦後に始まった「在独ユダヤ人の歴史」の当事者でもあった。同紙は読者に様々な協力を求めており、発行人マルクスが読者に向けて発した最初のメッセージでも、アルゲマイネ紙を読者全員と共に新聞を形作っていく参加型新聞とする意志が表明されている⁵²。

このメッセージに呼応するように、編集部に寄せられた読者からの質問への回答や、「読者の声」と題された投書欄が意識的に設けられていった。アルゲマイネ紙が読者との相互関係性をいかに重視したかは、このマルクスの表明だけでなく、「投書欄」に対する編集部の考え方にも表れている。アルゲマイネ紙創刊20周年に際する編集部の回想によると、同紙では最初から「投書」とは読者との重要なコミュニケーションの道具であると考えられていた⁵³。回想によると、むしろ「心地よい投書、不快な投書、その双方が存在する」が、とくに「建設的で率直な批判と反論」をしてくれる読者は、「投書を通じて、新聞の内容や新聞の姿勢に対して、自身の同意や拒絶を示そうとした賞賛すべき積極的同胞」である点で、アルゲマイネ紙の重要な「協力者・同僚」(Mitarbeiter)に数えられたのである。

実際に新聞上でマルクスと編集部が読者の批判的な投書を尊重する姿勢を取っていたことは、こうした証言を裏づけている。例えば、1947年1月19日号の投書欄「読者の声」に掲載された、ある長文の投書「古き幻想たち——ひとつの反論」の掲載は象徴的である⁵⁴。これは、設けられたばかりの文芸欄で連載が決まった寄稿シリーズ「ドイツ・ユダヤ人の文化的貢献」(„Jüdischer Anteil an der deutschen

Kultur“)の構想を批判するものであった⁵⁵。ナチ時代以前、そしてナチ時代のドイツのことを知るドイツ・ユダヤ人読者と思われる投書者E. K. は、その冒頭で、同連載は「ドイツ文化へのユダヤ人の関与についての注目に値する考察」であると評価した上で、ナチ時代以前のように、ドイツ・ユダヤ人がドイツにもたらした様々な業績を伝えてドイツ人を啓蒙するという手段で反ユダヤ主義を撲滅できないことはホロコーストが証明したと述べ、連載の意図に反論した。このように、ときに新聞側と相容れない意見であっても、それが建設的な議論で対話を前提とするものであれば掲載をいとわない姿勢によって、同紙を多様な言論が交わされる場とすることを目指したのである。

また、ここで拘うべきとされた声は、ドイツ・ユダヤ人のものだけではない。マルクスは上述の表明の中で「われわれは、真のユダヤ新聞という性格をわれらの新聞に付与することを課題とする」と宣言している⁵⁶。マルクスの言う「真のユダヤ人新聞」とは何だろうか。マルクスはここで「いかなるユダヤ的・政治的傾向を持っていても、すべてのユダヤ人に発言の場を与えたい」と述べている。その際、「リベラル派のユダヤ人」すなわちドイツ・ユダヤ人の声だけでなく、東欧ユダヤ人の大半を占めた「正統派のユダヤ人」にも、「彼らが言いたいことを言えるチャンスを提供」することへの意志を示した。このメッセージは、同紙が在独ユダヤ人全体の声に、平等に耳を傾ける役割を果たしていく決意を表明したものと見なすことができる。

(2) 在独ユダヤ人としての連帯

①新聞名称の意味

前述の通り、新聞の名称変化は、アルゲマイネ紙の地域的な拡大を意味した。1946年11月、同紙の発行地域はイギリス地区全体に拡大することになり、『イギリス地区のユダヤ人ゲマインデ紙』へと改称されたが、49年4月、創刊から4年目を迎えるにあたって与えられた名称『在独ユダヤ人一般週刊新聞』によって、通称「アルゲマイネ紙」(„die Allgemeine“)が定着していくことになる⁵⁷。

初期からの在英ドイツ・ユダヤ人協力者であり、ドイツ滞在時は編集部員としてもマルクスを支えたローヴェンタールは、創刊20周年に際して、『在独ユダヤ人一般週刊新聞』への改称が決定された、49年4月の編集会議での議論内容を証言している⁵⁸。彼によると、最終的にマルクスが「発見」したという新しい名称に、ローヴェンタールを含めてその場にいた編集部員は同じ思いを抱いた。

マルクスたちはこの名にどのような意味を与えたのだろうか。この話し合いの場では、「ユダヤ人」(Juden)と「一般」(allgemein)という語を入れることが「本質的に重要な点」とされた。まず、「ドイツ・ユダヤ人」(deutsche Juden)が選ばれず、「ユダヤ人」が選ばれたことについて

は、同じユダヤ人、ユダヤ教徒としての連帯を促す目的が反映されている。上述の最初の読者へメッセージの中でマルクスは、「あのかつての日々を闘った末に、ユダヤ人としての確信を持つに至った者同士」と述べているが、ナチ時代にユダヤ人として迫害された経験は、政治的・宗教的・文化的な背景の異なるドイツ・ユダヤ人とユダヤ人DPの共通項として、新聞上で繰り返し強調されたものであった。さらに、一年後に設立される中央評議会と同じ「在独ユダヤ人」(Juden in Deutschland)という名称が選ばれたことは、対外的に、ドイツのユダヤ人共同体は解体されるのではなく再建に向かうという意志を示すものでもあった。

後者にも、戦後ドイツのユダヤ人の多様性の受け皿となる意味が込められた。「全般」「一般」の意味を含む *allgemein* という語は、「カラフル、かつ、ごたませ」に、「多様な」人々が存在する戦後ドイツのユダヤ人を表すのに相応しいとされた。他方、新聞の内容に関しても、その「多様性に沿う」ものであり、「特定の狭い領域に制限されない」という目的に合致したと証言されている。

②歩み寄りの試み

アルゲマイネ紙で、在独ユダヤ人としての連帯が促された根拠は、ナチ時代にユダヤ人として迫害された者同士という共通項だけではない。同紙では、東欧出身のユダヤ人に歩み寄るための様々な試みが戦後初期から見られた。

例えば、演劇などで表現されたイディッシュ文化に光が当てられた。具体的には、ベルゲン＝ベルゼンに設置されたイギリス地区唯一のユダヤ人DP キャンプ内に作られた劇場や、そこでのユダヤ人DP 演劇集団の公演が取材された⁵⁹。「イディッシュ文化の再興」と呼ばれた DP キャンプ内での文化活動に並んで、アシケナジームの歴史文化、イディッシュ語やヘブライ語の文学、戦後初期にイディッシュ語で書かれた個人の日記、手紙、詩などが積極的に紹介された⁶⁰。

また前述の通り、ユダヤ人DP 側の協力者も存在し、交流も少なからず見られた。例えば、ベルゲン＝ベルゼンのユダヤ人DP キャンプの自治組織「解放ユダヤ人中央委員会」や、ユダヤ人DP 人口の多いミュンヘンで発行されたイディッシュ語日刊紙『ユダヤ・デイリー・フォワード』との交流を通じて、アルゲマイネ紙ではユダヤ人DP の声が伝えられた⁶¹。後者の記事はアルゲマイネ紙にしばしば転載されたが、その際は、同紙専属のイディッシュ語およびヘブライ語翻訳者ヘントリーク・イングスターによって翻訳されている⁶²。また、伝統的なユダヤ教の教育を受け、イディッシュ語、ヘブライ語、ドイツ語をはじめとする7か国語の話者である前述の協力者ベルンシュタインは、戦前から「ユダヤ学研究所」(YIVO)で活動していたことか

ら、戦後もイディッシュ文化の保存活動に従事し、主にドイツ語とイディッシュ語で数多くの調査や記録を残している。膨大なベルンシュタインの業績において特筆に値すると思われているものは、アルゲマイネ紙上で彼が長年担当した「よみがえる過去——ユダヤ人がドイツに遺してきた足跡を辿って」(„*Lebendige Vergangenheit. Auf den Spuren jüdischer Jahrhunderte in Deutschland*“)である。この連載は、ドイツ中の街々に遺されたユダヤ住民の生活の痕跡について、ベルンシュタイン自身が現地に赴き調査した結果を読者に報告するものであった。

③ドイツ＝ユダヤ史をめぐる

前述の新聞の名づけをめぐる議論において、1837年にマクデブルクでドイツ・ユダヤ人ルートヴィヒ・フィリップソン博士が創刊した『ユダヤ一般新聞』(„*Allgemeine Zeitung des Judentums*“)もまた基準の一つになっていたという証言は注目に値する。なぜなら『ユダヤ一般新聞』という名は、「水晶の夜」すなわち「1938年11月10日」に起きた「強制的没落まで」発行されていた、中央協会の機関紙の副題に受け継がれた名であり、ドイツのユダヤ人メディアの伝統が想起されるからだ。しかし結局は、この新聞名が過去に使われていたという理由からそのまま踏襲することは会議の中で諦められた。だがここで重要なのは、もし著作権上の問題や、その名称の歴史に「畏敬の念を込めて、手をつけずに『守り』続けるべき」であるという配慮がなければ、この副題が継承された可能性が高かったという証言である。ホロコースト後のユダヤ人世界において、中央協会はドイツ社会に「同化」したドイツ・ユダヤ人というネガティブなイメージを彷彿させる存在でもあった。それにもかかわらず、中央協会の機関紙副題がマルクスたちの名づけ会議において肯定的に参照されたことは、ドイツ・ユダヤ人の歴史と伝統もまた「アルゲマイネ」が表現する「多様性」に含まれるという認識を示している。

マルクスは当初から、ナチ時代以前のユダヤ人の文化・文学の継承の重要性も訴えていた⁶³。彼は、ナチによってユダヤ人作家の作品が1933年に焚書の対象となったという過去に言及し、この時に葬り去られたかつてのドイツ・ユダヤ人の作品や文化を継承していくことも、新聞の課題の一つとしたのである。文芸欄が設けられた際には、イギリス地区のすべてのゲマインデに向けて、同欄への掲載を目的とした作品の寄贈協力が求められている⁶⁴。また、47年11月に掲載された、マルクスの初めての巻頭論説記事の題目は「われらドイツ・ユダヤ人」(„*Wir, die deutschen Juden*“)であった⁶⁵。

前述の通り、ホロコースト後のドイツのユダヤ人の間でドイツ・ユダヤ人という言葉は、自分たちを示す呼称としてはタブー視されていた。「在独ユダヤ人」の呼び名の通

り、アルゲマイネ紙が、異なる宗教・政治・文化的背景をもつ多様な戦後ドイツのユダヤ人の受け皿となる新聞を目指していたことは確かである。だがその一方で、1933年以前のドイツにおけるユダヤ人の歴史やドイツ＝ユダヤ共生に関連するテーマも、アルゲマイネ紙上で見られた大きな関心事の一つであった。初期から編集部を支えた協力者の中には、戦前だけでなく戦後もドイツ＝ユダヤ史の研究と啓蒙に従事した者が少なからず存在した。ローヴェンタールはその一人であった。亡命先イギリスとドイツを戦後も行き来し、ローゼンストックとライヒマンと共にレオ・バック研究所の共同創設者となったローヴェンタールは、啓蒙以後のドイツ・ユダヤ人の歴史や文化に造詣が深く、アルゲマイネ紙では芸文欄で最も多くの欄を担当した。とくに彼が、文化的・学術的貢献をもつドイツ・ユダヤ人を発掘して毎回一人ずつ読者に紹介した「今なお聴こえる残響——今週の肖像」（„Der aktuelle Nachklang: Porträt der Woche“）は看板連載の一つとなった。他にも、ドイツ・ユダヤ人の関与した芸術・文化・学術・ユダヤ教・ユダヤ人の歴史などを取り上げた、ドイツの公共ラジオ放送の教養番組「ユーデントゥームの世界から」（„Aus der Welt des Judentums“）など、アルゲマイネ紙を特徴づけたローヴェンタールの欄は、好評を博した。

このように、マルクスだけでなく、少なくない同紙の協力者たちにとって、過去のドイツ・ユダヤ人の歴史は自分たちのアイデンティティを構成する重要な要素であり、「アルゲマイネ紙」という名に込められた、在独ユダヤ人の多様性の一端を担うべきものであった。

おわりに

本稿では、ナチ体制崩壊直後のドイツにおけるユダヤ人生存者の状況、占領下のドイツで数多く発行されたユダヤ人新聞の一つとしてアルゲマイネ紙が誕生し全国紙へと発展した経緯、同紙を支えた読者と国内外の協力者の全体像、そしてアルゲマイネ紙が在独ユダヤ人社会の再建のために果たそうとした役割と自己理解を検討してきた。ここから導き出された結論は、以下の通りである。

第一に、アルゲマイネ紙は在独ユダヤ人の間だけではなく、ドイツ人、さらに世界中の在外ドイツ・ユダヤ人を架橋した。ドイツ＝ユダヤ関係の改善に関心を寄せるドイツ側にとって、同紙は在独ユダヤ人へのメッセージを伝える媒体となった。さらに、イギリスを中心とするヨーロッパ、合衆国、南米大陸、イスラエルの諸都市に暮らす在外ドイツ・ユダヤ人が同紙の主要な協力者となっていたことは、同紙が在外ドイツ・ユダヤ人と在独ユダヤ人を繋ぐネットワークの結節点を成していたことを意味する。発行人マルクスがヴァイマル時代とナチ時代に国内外で築いた

人脈も、国際的な協力者ネットワークの形成を下支えした。

第二に、マルクスと中心的な担い手たちは、名称の通りこの新聞を、ドイツに留まったドイツ・ユダヤ人のためだけの新聞ではなく、ユダヤ人DPも含めた「在独ユダヤ人」のための新聞にすることを目指した。アルゲマイネ紙という名称も、出自の異なるユダヤ人から構成される戦後ドイツのユダヤ人社会の多様性の受け皿となると同時に、互いの違いを越えた在独ユダヤ人としての連帯を促す意図があった。その際、ユダヤ人DPとの関係においては、正統派のユダヤ教信仰とイディッシュ語・文化を尊重することで、ユダヤ人DPとの対等な関係構築が模索された。戦後初期に生じていたこうした動きに鑑みると、戦後のドイツ・ユダヤ人と東欧ユダヤ人の関係について、従来の説明で典型的であった、非対等な関係性や対立関係にのみ注目して語る姿勢は修正されるべきであろう。

第三に、当時、戦後のユダヤ人世界で強く否定されていた、ナチ時代以前のドイツのユダヤ人の歴史や伝統は、マルクスたちにとって、決して葬り去られるべき過去の遺物ではなかった。とりわけ、見解や思想の多様性が掲げられたアルゲマイネ紙では、ドイツ・ユダヤ人としてのアイデンティティも、戦後の在独ユダヤ人の一つの在り方として認められることが求められた。加えて、国内外のドイツ・ユダヤ人が戦後初期に寄稿したドイツ＝ユダヤ共生に関する数多くの論説や記事、ドイツ＝ユダヤ関係の改善に関心を寄せたユダヤ側とドイツ側双方の協力者たちの存在もまた、過去のドイツ＝ユダヤ共生が決してマルクスだけの関心事ではなかったことを証明するものである。

¹ 「ユダヤ人」（Juden）とは、ユダヤ教の定義によると、ユダヤ教徒の母親から生まれた者だが、本稿ではナチによってユダヤ人と定義され迫害の対象となった者、そのことによって戦後に自己をユダヤ人と認識した者のことも「ユダヤ人」として考察の対象に含める。

² ドイツ側の例として、ヨハネス・ラウが2001年に行ったベルリン・ユダヤ博物館常設展の開所式演説、クリスティアン・ヴルフが2010年のドイツ統一記念日に際して行った演説で見られるように、歴代の連邦大統領はユーデントゥーム（ユダヤ教・ユダヤ人・ユダヤ文化）をドイツとヨーロッパ基層文化の一部と見なしてきた。ラウの演説と対になる、同博物館館長ミヒャエル・ブルーメンタールの演説もユダヤ側の言説として重要である。両者の演説では、連邦博物館の一つとして開館し、ベルリンのユダヤ人ゲマインデ議長ハインツ・ガリンスキーのイニシアティブに端を発するこの常設展は、現在に至る二千年のドイツ＝ユダヤ史を示すという構想において、単なる迫害された少数派の歴史ではなく周囲の多数派キリスト教世界と互いに影響を与え合ってきたこと、とくに近代ドイツの形成においてユダヤ人が重要なアクターとなってきたという視点が強調されている。

³ 「ドイツ＝ユダヤ関係」（die deutsch-jüdischen Beziehungen）とは、ドイツ人とユダヤ人、キリスト教（徒）とユダヤ教（徒）、ドイツ文化とユダヤ文化など複数の関係を含意するためドイツ語では

複数形で表現される。同時代人も使用する用語ではあるが、現在、研究上の分析概念としても広く用いられており、本稿でも、分析概念としても用いている。

⁴ 従来の研究では、「ドイツ・ユダヤ人」という呼称はホロコースト後のユダヤ人世界でいわゆる「同化ユダヤ人」を揶揄する蔑称ともなったこと、自称として使用することを避けた当事者が少なくなかった背景を踏まえて使用されている。本稿では、こうした意味的な変化が生じたことを前提としつつ、その一方で戦後初期の同時代人の間で、ナチ時代以前からのドイツ出身のユダヤ人を指す言葉として「ドイツ・ユダヤ人」が少なからず使用されていた事実を鑑みて、この用語を使用している。

⁵ ホロコーストを生き延びた彼らは、DP (Displaced Person) としてドイツに留まった。DP とは、一般に戦争中の強制連行や避難のために自国の国境外におかれた民間人を指す概念である。ドイツの西側占領地区には1945年に約650万から700万のDPが確認されている。その大半は、戦争末期にヨーロッパ各地、とりわけ東欧諸国からドイツ国内に連行され、過酷な労働を強いられた強制労働者や戦争捕虜である。DPの多くは終戦とともに故国への帰還を果たし、その数は1945年9月に180万人にまで減少した。DPの中で、約5万人と小規模ながら独特の集団を形成していたのが、ホロコーストを生き延びたユダヤ人DPであった。Königseder, Angelika/Wetzel, Juliane, *Lebensmut im Wartesaal. Die jüdischen DP's (Displaced Persons) im Nachkriegsdeutschland*, Frankfurt am Main 1994, S. 7; 武井彩佳『戦後ドイツのユダヤ人』白水社、2005年、50頁。

⁶ その筆頭に挙げられる研究として、Maór, Harry, *Über den Wiederaufbau der jüdischen Gemeinden in Deutschland seit 1945*, Dissertation Universität Mainz 1961。フランク・シュテルンとミヒャエル・ブレナーの著作は、第二世代による取り組みの先駆けとなった。Stern, Frank, *Im Anfang war Auschwitz. Antisemitismus und Philosemitismus im deutschen Nachkrieg*, Gerlingen 1991; Brenner, Michael, *Nach dem Holocaust. Juden in Deutschland 1945-1950*, München 1995。

⁷ とくにベルリン工科大学付属反ユダヤ主義研究所は、反ユダヤ主義研究やユダヤ人DP研究を皮切りに、ドイツの研究機関による研究に先鞭をつけた。代表的な文献として、Bergmann, Werner/ Erb, Rainer (Hg.), *Antisemitismus in der politischen Kultur nach 1945*, Opladen 1990; Königseder/Wetzel, *Lebensmut im Wartesaal*。

⁸ Brenner, Michael (Hg.), *Geschichte der Juden in Deutschland. Von 1945 bis zur Gegenwart. Politik, Kultur und Gesellschaft*, München 2012。

⁹ Kauders, Anthony D., *Democratization and the Jews. Munich 1945-1965*, Lincoln 2004。

¹⁰ 日本では主に補償研究が進められてきた。とくにユダヤ人の財産返還問題に関する現代史家の武井彩佳氏の研究は、国際的に参照される基本研究となっている。Takei, Ayaka, *The Jewish People as the Heir. The Jewish Successor Organizations (JRJO, JTC, French Branch) and the Postwar Jewish Communities in Germany*, Diss. Waseda University Tokyo, 2004。邦語文献ではとくに、武井彩佳『ユダヤ人財産はだれのものか——ホロコーストからパレスチナ問題へ』白水社、2008年。また、連邦共和国とイスラエル国家および国際的ユダヤ人諸組織の間で1952年に締結された「ルクセンブルク協定」については、武井氏と政治学者の板橋拓己氏の研究を参照のこと。武井彩佳『＜和解＞のリアルポリティクス——ドイツ人とユダヤ人』みすず書房、2017年；板橋拓己「ドイツとイスラエルの『接近と和解』——ルクセンブルク補償協定への道、1949-1953」松尾秀哉／白井陽一郎編『紛争と和解の政治学』ナカニシヤ出版、2013年。

¹¹ Sinn, Andrea, *Jüdische Politik und Presse in der frühen Bundesrepublik*, Göttingen 2014。

¹² 戦後ドイツのユダヤ人史に関する先行研究でも、ナチ体制の崩壊とユダヤ人の解放、残留と移住、共同体の再建と解体をめぐる選択と要求の間で揺れた過渡期を経て、在独ユダヤ人社会が定着へと方向づけられていく1945年から1950年代前半までの時期が一つの区切りと見なされている。その際、中央評議会の初代事務局長ヘントリーク・ゲオルゲ・ファン・ダムが提起した、45年春からイスラエルが建国される48年5月までの「集合・支援・移住」の時期、「基盤の強化」に特徴づけられる53年頃までの時期を合わせた戦後初期の捉え方が、現在も戦後ドイツのユダヤ人史における有効な区分として継承されている。Van Dam, Hendrik George, *Die Juden in Deutschland nach 1945*, in: Böhm, Franz/Dirks, Walther (Hg.), *Judentum. Schicksal, Wesen und Gegenwart*, Bd. 2, Wiesbaden 1965。

¹³ 新聞の地域的な拡大過程で複数回の名称変更が行われているが、本稿では主に創刊時の『ノルトライン・プロヴィンツとヴェストファーレンのユダヤ人ゲマインデ紙』(*Jüdisches Gemeindeblatt für die Nord-Rheinprovinz und Westfalen* 以下、JGbl-fNRW)、発行期間の長かった『イギリス地区のユダヤ人ゲマインデ紙』(*Jüdisches Gemeindeblatt für die britische Zone* 以下、JGbl-fbZ)』と『在独ユダヤ人一般週刊新聞』(*Allgemeine Wochenzeitung der Juden in Deutschland* 以下、AWJD)の記事を用いた。本文中では、これら新聞の総称であり、新聞発行側も自称した「アルゲマイネ紙」で統一する。

¹⁴ とくに帝政期からヴァイマル期のドイツ・ユダヤ人の諸潮流については、以下の文献に詳しい。長田浩彰『われらユダヤ系ドイツ人——マイノリティから見たドイツ現代史 1893-1951』広島大学出版会、2011年；野村真理『西欧とユダヤのはざま——近代ドイツ・ユダヤ人問題』南窓社、1992年。

¹⁵ Wildt, Michael, *Geschichte des Nationalsozialismus*, Göttingen 2008, S. 122。

¹⁶ Geis, Jael, *Übrig sein – Leben „danach“. Juden deutscher Herkunft in der britischen und amerikanischen Zone Deutschlands 1945-1949*, Berlin 1999, S. 15；武井『戦後ドイツのユダヤ人』13頁。

¹⁷ Brenner, *Nach dem Holocaust*, S. 24。なお、1945年から49年まで連合国による分割占領統治を受けたドイツの4つの占領地区には、終戦前後の時期に流入した者を含めて最大で25万のユダヤ人が存在したが、その大半はユダヤ人DPである。ただし戦後初期は人口移動が激しかっただけでなく、様々な組織がそれぞれ異なる基準の統計情報を集めていたため、この時期の人口統計は近似値でしかない。Geis, Jael, *Auschwitz und der Wiederaufbau der jüdischen Gemeinden in Deutschland*, in: Brüggemann, Heinz u. a. (Hg.), *Auschwitz in der deutschen Geschichte*, Hannover 2010, S. 196f。

¹⁸ 武井『戦後ドイツのユダヤ人』、55頁。なかでも、1947年7月にポーランドのキェルツェで発生したボグロムで、ユダヤ人に対する暴力はピークに達した。戦後ポーランドにおける反ユダヤ主義的事件については、以下の文献を参照。グロス、ヤン・T『アウシュヴィッツ後の反ユダヤ主義——ポーランドにおける虐殺事件を糾明する』(柴谷徹訳)、白水社、2008年。

¹⁹ Brenner, *Nach dem Holocaust*, S. 58-62。

²⁰ 武井『戦後ドイツのユダヤ人』、62頁。

²¹ Geis, *Übrig sein*, S. 33。

²² Van Dam, Hendrik George, *Jüdische Presse im Nachkriegsdeutschland*, in: *Vom Schicksal Geprägt. Freundesgabe zum 60. Geburtstag von Karl Marx*, hrsg. von M. W. Gärtner/H. Lamm/E. G. Lowenthal, Düsseldorf 1957, S. 28。

²³ Ibid., S. 28f。

²⁴ Sachser, Friedo, In einigen eigenen Sachen. Aus den gesammelten und nicht gesammelten Memoiren der Redaktion, in: *20 Jahre Allgemeine Dokumentation und Echo*, hrsg. von Verlag der AWJD, Düsseldorf 1966, S. 67.

²⁵ *Jüdisches Gemeindeblatt. Die Zeitung der Juden in Deutschland* („wöchentlich“), 3. Jg. Nr. 11, 10. September 1948.

²⁶ *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 25, 5. April 1947, S. 14.

²⁷ 各ゲマインデの活動報告、構成員へのお知らせや祝辞・弔辞、「礼拝日程」などに並び、毎号でユダヤ暦とグレゴリオ暦の対照表とユダヤ教の祝祭日が記された「週間カレンダー」が掲載された。

²⁸ 創刊からおよそ半年後に「各地のゲマインデから」の題目でゲマインデ欄が設置されるが、アメリカ地区、フランス地区、さらにはソ連地区のユダヤ人ゲマインデに関連する出来事も報じられるようになる。Aus den Gemeinden, in: *JGbl-fNRW*, 1. Jg., Nr. 12, 26. September 1946, S. 10.

²⁹ Auerbach, Philipp, Zum Geleit, in: *JGbl-fNRW*, 1. Jg., Nr. 1, 15. April 1946, S. 1.

³⁰ Geis, *Übrig sein*, S. 29-31.

³¹ Wiener, Alfred, Jüdische Presse – Spiegelbild einer Situation, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 114.

³² Ibid.

³³ *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 25, 5. April 1947, S. 14.

³⁴ Ihre Verwandten und Freunde im Ausland, in: *JGbl-fbZ*, 3. Jg., Nr. 3, 12. Mai 1948, S. 4.

³⁵ 創刊20周年に際して世界各国の主要メディアから寄せられた祝辞の文面からも、アルゲマイネ紙が国際メディア界で敬意を払われる存在となったことが分かる。Das Echo. Presse im In- und Ausland, in: *20 Jahre Allgemeine*, S. 53-61.

³⁶ Geburtsurkunde von Karl Marx, 11. Oktober 1949, Landesarchiv NRW., Düsseldorf, BR 2182, 16492 (3); Die Anfänge der Allgemeinen Jüdischen Wochenzeitung. Interview mit Lilli Marx, in: Brenner, *Nach dem Holocaust*, S. 179. なぜマルクスの両親が、親戚でもないにもかかわらず、隣町で生まれた哲学者カール・マルクスと同じ名前を次男につけようとしたのかについては伝承されていない。Ritzel, Weitsicht, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 85-86.

³⁷ Lamm, Hans, Nachruf auf Karl Marx (1897-1966). Aus dem Aufsatz von EMUNA. *Blätter für christlich-jüdische Zusammenarbeit*, Köln, März 1967, in: *Karl Marx (9. Mai 1897 - 15. Dezember 1966) zum Gedenken*, hrsg. von L. Marx, Düsseldorf 1967, S. 41.

³⁸ Arnold, Karl, Freiheit und Recht, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 13. マルクスはバーデン・ヴェルテンベルクの青少年宿泊所運動の共同立ち上げ人でもあった。1920年代の青年運動でマルクスと出会い、第二次世界大戦後にまで続く友情を築いたエルンスト・レンマーは、「私にとってそうだったが、疑いもなくマルクスにとっても、その後の精神的・文化的・民主主義的態度と彼の仕事における展開を規定するものだった」と述べ、第一次世界大戦の復員後、マルクスを貫いた民主主義者・自由主義者としての態度について、青年運動の影響を指摘している。Lemmer, Ernst, Aus gemeinsamen Jugendlieben, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 71-72.

³⁹ Marx, Karl, in: *Biographisches Handbuch der deutschsprachigen Emigration nach 1933-1945 (BHdE)*, hrsg. von W. A. Röder u. H. A. Strauss, Bd. 1, Berlin u. a. 2016, S. 479. 1930年の帝国議会選挙では、マルクスはドイツ民主党の補欠候補になるが、最終的にはレンマーの当選を有利にする判断から出馬を断念した。Lemmer, Aus gemeinsamen Jugendlieben, S. 72.

⁴⁰ 1949年9月、ホイスが初代連邦共和国大統領に選出されたときに大統領府に宛てたホイスへの書簡の中で、マルクスは、この集

会でのホイスとの出会いを想起している。Brief von Karl Marx an Theodor Heuss, 15. September 1949, Bundesarchiv Koblenz, Bundespräsidialamt/Amtszeit des Prof. Dr. Theodor Heuss, B122, 2086.

⁴¹ カールと一人の姉だけがマルクス一家の中でホロコーストを生き延びた。Marx, Karl, in: *BHdE*, Bd. 1, S. 479; Karl Marx, in: Verein EL-DE-Haus Köln (Hg.), *Unter Vorbehalt. Rückkehr aus der Emigration nach 1945*, Köln 1997, S. 154.

⁴² Sinn, *Jüdische Politik*, S. 81.

⁴³ Sachser, Friedo, In einigen eigenen Sachen, S. 71-72.

⁴⁴ Gärtner, Marcel W., Mit der Jugend jung, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 48-49.

⁴⁵ 中央協会の歴史については、長田『われらユダヤ系ドイツ人』を参照のこと。

⁴⁶ なかでもストックホルム在住のドイツ文学・亡命文学研究者ヴァルター・A・ベーレントゾーンは、ナチ時代以前のドイツ・ユダヤ人の歴史について巻頭論説を執筆するなど、アルゲマイネ紙の主要な論客であった。

⁴⁷ Aus der Liste der ältesten Mitarbeiter der Allgemeinen, in: *20 Jahre Allgemeine*, S. 74.

⁴⁸ Giordano, Ralph, *Narben, Spuren, Zeugen. 15 Jahre Allgemeine Wochen Zeitung der Juden in Deutschland*, Düsseldorf 1961.

⁴⁹ 例えばヴィーナーは、アルゲマイネ紙が果たしてきた役割を表す言葉としてまさに「映し鏡」という表現を用いている。Wiener, *Jüdische Presse*, S. 114.

⁵⁰ Wir bitten zu beachten (Der Verlag), in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 23, 5. März 1947, S. 2.

⁵¹ Wir bitten unsere Leser, in: *JGbl-fbZ*, 2. Jg., Nr. 2, 30. April 1947, S. 4.

⁵² Marx, Karl, Unsere erweiterten Aufgaben und Ziele, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg. Sondernummer, 15. November 1946, S. 5.

⁵³ Sachser, In einigen eigenen Sachen, S. 71.

⁵⁴ E. K., Die alten Illusionen. Eine Entgegnung, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg. Nr. 20, 19. Januar 1947, S. 11-12.

⁵⁵ 批判された構想が示された記事は、May, Richard, Jüdischer Anteil an der deutschen Kultur, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 14, 27. November 1946, S. 9.

⁵⁶ Marx, Karl, Unsere erweiterten Aufgaben und Ziele, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg. Sondernummer, 15. November 1946, S. 5.

⁵⁷ マルクスの死後、とくに中央評議会の機関紙となる1971年のタイミングで名称は再び変更されるが、同紙のイメージと結びついた「アルゲマイネ」という言葉は残されており、現在の『ユダヤ・アルゲマイネ紙』（„*Jüdische Allgemeine*”）に至るまで引き継がれている。なお、生前のマルクスは中央評議会と協力関係にありながらも評議会の機関紙となることは避け、あくまでも「独立新聞」の立場を堅持した。

⁵⁸ この名づけの議論についての引用は、以下の証言から行った。E. G. L., Die Namensfindung. Zur Geschichte des Zeitungstitels. Erinnerungen, in: *20 Jahre Allgemeine*, S. 65.

⁵⁹ 例えば、1947年2月には演劇の一場面が写真で紹介され、同年8月には海外公演での成功が祝われた。Scene aus „Goel“ (Theatergruppe des Kazet-Theaters Belgen-Belsen), in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg. Nr. 21, 5. Februar 1947, S. 2; Kultur. Wem Ehrung gebührt. Erfolge des Belsener „Kazet-Theaters“ im Ausland, in: *JGbl-fbZ*, 2. Jg., Nr. 9, 13. August 1947, S. 5.

⁶⁰ 例えば、以下の寄稿記事がある。Zyd: Aus meinem Wiener Tagebuch. Wiener Briefe 1947 (Aus dem Jüdischen von I. Ingster), in: *JGbl-fbZ*, 2. Jg., Nr. 6/7, 9. Juli 1947, S. 5.

⁶¹ とくに後者との友好関係は長く続き、後継のユダヤ人DP新聞『新しい新聞』の発行人はアルゲマイネ紙創刊20周年に際して長

文の祝辞を寄せている。Gid, Marion, Verleger der „Neue Jüdische Zeitung“ (München), Das Echo. Presse im In- und Ausland, in: *20 Jahre Allgemeine*, S. 60.

⁶² Impressum. Übersetzungen aus dem Hebräischen und Jiddischen: Hendryk Ingster, in: *Fragen der Wiedergutmachung. Beilage zum jüdischen Gemeindeblatt für die britische Zone*, in: *JGbl-fbZ*, 2. Jg., Nr. 1, 15. April 1947, S. 10.

⁶³ Marx, Karl, Unsere erweiterten Aufgaben und Ziele, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg. Sondernummer, 15. November 1946, S. 5.

⁶⁴ Der Verlag, Kultur, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 16, 27. November 1946, S. 8.

⁶⁵ Wir, die deutschen Juden, in: *JGbl-fbZ*, 1. Jg., Nr. 16, 27. November 1946, S. 1. 記事自体は、今なお反省の色が見えないドイツ住民や、補償に着手しないドイツ当局への厳しい批判が主な論調であった。無記名記事であるが、マルクスの記事であることが同時代人のいくつかの証言から明らかになっている。Lamm, Hans, Ein deutscher Jude, in: *Vom Schicksal Geprägt*, S. 6.

Die Gründung der „Allgemeinen“ (*Allgemeine Wochenzeitung der Juden in Deutschland*) und die Juden in Deutschland nach dem Holocaust

Madoka TAMURA

Was bedeutete die Anwesenheit von Juden in Deutschland nach 1945 und der Wiederaufbau ihrer Gemeinschaft? In der deutschen Öffentlichkeit werden die in Deutschland lebenden Juden als ein integraler Bestandteil der deutschen Demokratie angesehen. Die Beziehungen zwischen beiden Seiten in der Vergangenheit wurden als wichtiger Aspekt nicht nur des Holocausts, sondern auch der Geschichte des Zusammenlebens vor der Nazi-Zeit hervorgehoben, und die jüdische Seite teilt nun diesen Grundgedanken.

Diese aktuelle Perspektive auf die deutsch-jüdischen Beziehungen war jedoch keineswegs selbstverständlich, wenn man auf die Zeit unmittelbar nach dem Zusammenbruch des NS-Regimes im Jahr 1945 zurückblickt. In der Mehrheit der deutschen Bevölkerung waren die Kontinuität von Antisemitismus, ein starkes Gefühl der Opferrolle und Gleichgültigkeit gegenüber den jüdischen Überlebenden festzustellen. Die Realität sah jedoch so aus, dass Deutschland kein Boden ohne Juden wurde, und der „Zentralrat der Juden in Deutschland“ wurde im Juli 1950 als Spitzenorganisation gegründet, die die wiederaufgebauten jüdischen Gemeinden in verschiedenen Regionen in Deutschland vereinigte.

Wie wurde die Bildung einer neuen Identität als „Juden in Deutschland“ unmittelbar nach dem Holocaust von Zeitgenossen versucht? Und welche Gedanken hatten sie über die deutsch-jüdischen Beziehungen in Vergangenheit und Gegenwart? Durch eine Analyse der „Allgemeinen“ (*Allgemeine Wochenzeitung der Juden in Deutschland*), die im Frühjahr 1946 als lokales jüdisches Gemeindeblatt gegründet wurde und sich bis zur Gründung der Bundesrepublik zur einzigen überregionalen jüdischen Zeitung entwickelte, geht der vorliegende Aufsatz diesen Fragen auf den Grund.

Insbesondere soll geklärt werden, welche Rolle beim Wiederaufbau die *Allgemeine* der jüdischen Gemeinschaft im Nachkriegsdeutschland zuge dachte und wie sie versucht, ein

Gefühl der Solidarität unter den Juden in Deutschland zu fördern.

Der erste Abschnitt des Aufsatzes behandelt die Situation der jüdischen Überlebenden. Dabei werden die unterschiedlichen Umstände der Juden deutscher Herkunft („deutsche Juden“) und der Juden osteuropäischer Herkunft („jüdischen DPs“) in Betracht gezogen. Deutsche Juden spielten eine führende Rolle beim Wiederaufbau der Gemeinde, während ihre Erfahrungen mit dem Holocaust ihre jüdische Identität stärkten. Die jüdischen DPs bildeten eine völlig neue jüdische Gruppe in Nachkriegsdeutschland. Die jüdischen Zeitungen dienten als Instrument zur Förderung eines neuen Solidaritätsgefühls unter den Überlebenden des Holocaust, die fast alle ihre Bindungen verloren hatten.

Im zweiten Abschnitt geht es um die Gründung und Entwicklung der *Allgemeinen*.

Erstens behielt die *Allgemeine* selbst nach ihrer Ausweitung zu einer überregionalen Zeitung ihre Ursprünge als Gemeindeblatt bei, die nützliche Informationen für jüdische Überlebende lieferte und als Bindeglied zwischen ihnen und dem Wiederaufbau ihres Lebens diente.

Zweitens gab es die Träger der *Allgemeinen* – „Mitarbeiter“ genannt – nicht nur auf der Seite der deutschen Juden, sondern in geringer Zahl auch auf der jüdischen DP-Seite. Auch deutsche Juden, die außerhalb Deutschlands lebten, fungierten als Mitarbeiter. Die Anwesenheit nichtjüdischer deutscher Mitarbeiter ist in der Zeitung ebenfalls zu erkennen. Es handelte sich vor allem um Deutsche, die individuell an der Verbesserung der deutsch-jüdischen Beziehungen interessiert waren, unabhängig von ihrer Partei- oder Konfessionszugehörigkeit. Die Bekanntschaft vom Herausgeber Karl Marx (1897-1966) mit den politischen Eliten der Bundesrepublik während der Weimarer Zeit und seine politischen Aktivitäten sowie seine Begegnungen

mit anderen deutschen Exilanten haben die *Allgemeine* von Anfang an unterstützt.

Im dritten Abschnitt „die Rolle und das Selbstverständnis der ‚Allgemeinen‘“ werden die Diskurse von Marx und seinen zentralen Mitarbeitern daraufhin untersucht, nach welchen Prinzipien und mit welchen Zielen sie herausgegeben wurden.

Die *Allgemeine* sollte als „Spiegel“ dienen, der die Situation der Juden in Deutschland nach dem Holocaust reflektierte, und als „Zeitzeuge“, der die Schritte der jüdischen Gemeinschaft nach 1945 aufzeichnete.

In der *Allgemeinen* rief Marx dazu auf, im Nachkriegsdeutschland eine neue jüdische Gemeinschaft zu bilden, die politische, religiöse und kulturelle Unterschiede überwindet. Damit gab Marx eine klare Botschaft über die Rolle der *Allgemeinen* zur Förderung der Solidarität unter den Juden in Deutschland. Dabei wurde versucht, z. B. durch die Einführung eines großen Teils der jiddischen Literatur und des jiddischen Theaters das gegenseitige Verständnis zwischen deutschen und osteuropäischen Juden zu fördern. Andererseits wurden die Traditionen des deutschen Judentums, die als Relikte der Vergangenheit begraben werden sollten, auch als Bestandteile der Vielfalt der jüdischen Menschen in Deutschland gesehen.

Abschließend werden die Ergebnisse des Aufsatzes wie folgt zusammengefasst.

Erstens schlug die *Allgemeine* Brücken zwischen Juden in

Deutschland, nichtjüdischen Deutschen und Juden im Ausland. Für die politischen Führer der Bundesrepublik war sie ein Medium, um den Juden in Deutschland ihre Botschaft zu vermitteln. Die *Allgemeine* fungierte als der Knotenpunkt eines internationalen Netzwerks, das vor allem deutsche Juden im In- und Ausland, die eine Verbindung zu ihrem Heimatland suchten, miteinander verband.

Zweitens war der Name der Zeitung Ausdruck ihrer Idee und ihres Selbstverständnisses. Die *Allgemeine* sollte auch eine Plattform für die Vielfalt der jüdischen Gemeinschaft im Nachkriegsdeutschland sein. In den Beziehungen zu den jüdischen DPs führten die Achtung des orthodoxen jüdischen Glaubens und die Betonung der gleichen historischen Wurzeln in der jiddischen und aschkenasischen Kultur dazu, dass man sich um den Aufbau gleichberechtigter Beziehungen zu ihnen bemühte. Angesichts dieser Bemühungen in der frühen Nachkriegszeit sollten frühere Darstellungen der Nachkriegsbeziehungen zwischen deutschen Juden und osteuropäischen Juden, die sich nur auf ungleiche oder antagonistische Beziehungen konzentrierten, revidiert werden.

Drittens belegen die große Zahl von Beiträgen deutscher Juden im In- und Ausland zum Thema sozusagen eine „deutsch-jüdischen Symbiose“ und die zahlreichen Mitarbeiter, die an einer Verbesserung der deutsch-jüdischen Beziehungen interessiert waren, zeigen, dass der Wiederaufbau der deutsch-jüdischen Beziehungen nie das alleinige Anliegen von Marx war.